

ーごはん、何気ない日常の食事が、私にと、てど
 増汁。そしてふく炊き上がたお米。
 っ た旬の野菜がたっぷり入ったおかずやお味
 前のように食べたい母のご飯。祖母達の作
 強く思った。日本にいるときは、毎日当たり
 っ やっぽりお母さんのご飯が食べたくなしと
 っ アミリーが作ってくれた料理を食べながら
 滞在してから一週間ほどたつ頃、ホスト
 だんだんと心も体も疲れていくのが分かった
 はっ これも異文化体験だと楽しんでいたが
 米が食卓に並ぶことはなかった。初めてのうち
 ないがほとんどで日本のように炊きたてのお
 シリアル、昼はサンドウィッチ、夜はパスタ
 っ 食のの違いだった。留学中の食事は、朝は
 その中でも特に印象に残った。いることは、
 カルキヤーシヨツの連続だった。
 いた初めての海外生活だった。だが、想像以上に
 私はず去年、海外に短期留学をした。夢見て
 日本松中学校二年 瀬尾 水樹

れだけ大切なものだったか、遠く離れてか
 ら初めて気付かされた。
 留学中は自分で料理を作ることができた
 私はホストファミリーにお願いして、お米を
 炊いてみることにした。電子レンジ用の簡易
 炊飯器だったが、炊き上がって蓋を開けた瞬
 間、あの懐かしい香りがふわっと舞い上が
 た。その香りで一気に目頭が熱くなり、母の
 料理を思い出した。食材の種類や調味料が限
 られていて、おかずも日本のような味で再現
 するのには難しかったが、自分で作ったご飯は
 いこかあの温かさを思い出させてくれた。
 その日は、白ご飯と現地の食材のお味噌汁
 を食べただけだったが、どんな豪華な外食よ
 りも美味しく感じた。体がほっとして心が温
 かくなった。私はこの時、やっと気が付いた
 っ。ご飯がある、ということは、食べ物があ
 る、という意味ではない。安心できる場所があ
 る、っ。自分を支えてくれる人がいる、とい
 うことなのだ。

海外では食べるものだけではなく、食べる環境も違っていた。日本では、家族皆で食卓を囲み、楽しく話をしながら食べる。しかし留学先ではホストファミリーの食事時間がバラバラで、食事はお腹を満たすだけのものという印象を強く受けた。

留学生活はあという間に終わり、私は日本に帰ってきた。帰国して久しぶりの家族との夕食。炊いたばかりの白ご飯に、私の大好きな母が作った豚汁。私は一口食べると、

「やっほりうちのご飯が一番だよ。」

と無意識に口から出ていた。これを感じた。この後の目はいつともより嬉しそうに見えた。この後も、留学先での体験や思い出を家族に話した。今までで一番会話が弾んだ夕食になった。

この留学を通して学んだことは、英語や異文化だけで話さなかった。私にとり、当たり前の文化だけで話さなかった。自分を受け入れてくれた。たかには気付いたことも大きな収穫だった。そして、食は人と人を繋いでくれる。そ

れほどんなに離れていても変わらないう作。
た人の愛情と努力が話まゝでいるからこそ、
美味しく、休日も心も温まるものになる。
この先いここに行っても、どんなご飯を食べ
ても、私の心の中には家族との温かい食卓と
憩いのこもったお飯がある。それは日本で生
まれ育った、私の原点なのだ。
これから、留学で学んだこと、家族とい
う存在の大切さ、食のありがたみを胸に、日
々感謝しながら生きていきたい。